

「問題解決」的思考と「体験」

原野利彦

Problem-Solving Thinking and Experience

Toshihiko HARANO

問題意識

近年、「体験」重視が盛んに主張されているが、これが如何なる意味を持つのか。それはいつも思い出したように叫ばれるスローガンの一つに過ぎないのか。それとも時代の転換期にふさわしい深い意味をもって主張されているのか。もしそうだとすれば、その意味とは何か。小論では近代の中心概念である「有用性」の概念の検討に焦点を合わせてこの問題を論じてみたい。なぜならば、今叫ばれている「体験」重視が、たとえ消費者志向型の「あそび」や「面白さ」の要素を加味しているとはいえ、子供の「現在の体験そのもの」を重視していないように思われるからである。つまり、子供の体験を重視するという美名の下に、近代の「体験」概念の検討がおろそかにされているからである。もし「体験そのもの」と「役に立つ体験」との相違を曖昧にしたまま体験重視を言っているにすぎないとすれば、その教育活動は子供の疎外を促進することになるだろう。

1. 「直接的な」体験といえども「媒介」的（間接的）なものである。

常識的な意味で言えば、「体験」(Erlebnis)とは自分または他人が実地に或る事を経験(Erfahrung)することであり、あるいはその経験自身を指す。あえて経験と区別すれば、体験が個人的なものにとどまる色彩が強いついことであろう。このことは体験が一般性に欠け、情緒的であるが故に経験に較べて価値が低いものであるかのように言われたりするが、逆に、体験が具体性に富み、我々の「生」そのものであるとの見解も成り立つ。W. Diltheyはこの体験の理解を目指した。

事実、我々は日常生活において「体験」について色々と語る。この語り得るといふことは、体験が「何か」を「実地に」しているという文脈を備えたものであることを認めることであり、そのことが体験の「意味」を構成するということが分かる。つまり「直接的な」体験といえども「媒介」的（間接的）なものであり、或る文脈を備えて認識されているのである。

2. 近代の「体験」は「主体」を要請する。

まず近代の「体験」理解は「自分が」または「誰々が」「何かを体験している」という形をとる文脈の中に成立する。換言すれば体験とは或る「主体」が何かを実地にしているという文脈の成立を認めることであり、更にそれを支えとして世界を諸カテゴリー（諸領域、境界）に分節することによって、それに「合理性」や「現実性」を付与することで

ある。このことは近代になって「主体」の地位を獲得した「個人」という特権的なカテゴリーに諸出来事の起源を強制的に還元することである。そしてそれは現代の我々にとっては暗黙の前提となっている。「体験」は或る個人のもの、乃至個人に擬せられるもの（たとえば法人などの諸団体）に還元されるものである。そして個人は生起する様々な出来事の起因であり、最終的な所有者であることが前提されている。この文脈が個人をコピー関係が成立する個々の「極」または「局面 (phase)」として成立させる。このことが誰々が他の何某から学ぶとい「学習」関係、つまり何某の真似（ミミクリー）をするなどという関係を可能にする。この文脈の精緻化は「評価」活動の概念装置の精緻化でもある。だからこそ学校教育において個々の児童・生徒の「体験」が評価可能だとされているのである。

3. 「有用性」

この局面としての個人は「有用性」に従属する。それも「保存」(生存), 「所有」の下位概念としての有用性に従属する。つまり、将来に備え、存続し、自分や家族や国家について考え、子孫に富を譲渡する可能性について考慮し得ることが当然とされている文脈の中に成立する個人である。「生涯学習のための基礎学力」などの教育用語は、そのことを端的に言い現している。それは或る人間の企てが死や病氣や事故などによって挫折させられるとしても、他の個人や集団によって引き継がれるであろうし、そのためにある程度の恒久性がある文脈をもつ「所有」が慣習化されている文脈における「有用性」の中での個人であり、その個人の「体験」である。この「有用な体験」の文脈を守り抜き継続することによって、我々は個々の存在の危うさ（死・挫折・崩壊）に対して必死に抵抗しているのである。

4. <暗黙知> に支えられている「体験」

この「有用性」をもって「体験」を評価する際の基準とすることは、あまりにも自明すぎて我々の意識に殆どのぼってこないほどである。「有用性」のみならず、様々な文脈を暗黙のうちに利用しながら、我々は物事を迅速に運んでいく。つまり「直接的な」体験といえども、暗黙のうちに多様な媒体（文脈）に支えられているのである。だからこそ我々はその暗黙の媒体（文脈）を「発掘」して、意識を「深化」して様々な体験をシミュレートすることが出来る。或る社会や階級のもつアンビバレンスや暗い部分を見えないところ放逐し、意識から抹殺する排除の構造もこの暗黙知の働きとしてある。

勿論、社会の変動が少なく、比較的安定している時や、ごく限られた範囲内での作業を仕遂げる場合などには、この暗黙のルールをそれほど意識しないで済む。

だが社会の変動が激しくなったり、より広域の活動が相互依存関係に入り始めると暗黙知が意識されざるを得なくなる。つまり相互に学び合う（コピー）関係を支えていた暗黙のルールがあらためて検討されざるを得なくなる。コピーのルールは分断され、相互を調整する方法も方角も見失われる事態が頻発する。今まで自明に見えた生活する世界が急に迷宮化する。個々の領域はあたかも分離可能な作業方式を持ち、各人はそれぞれ自分の役割を遂行していればよいという世界ではなくなる。一意専心に振舞うことが困難になる。

今まで一様に見え、かつそのように振舞ってきた各エージェントが様々な相貌をもつ伝達者に変化し、予想や期待に反する行為をとりはじめる。我々は今まで能率的に進められていた様々な活動が如何に多くの錯綜した暗黙知に支えられていたかを痛感し愕然とする。世界はもはや単に多様性という言葉で済まされないような迷宮となる。プロセスは内外の入れ子状態になり、もともと外部の問題であったものが急に内部化したり、内部の問題が外部のそれであったりする。こうして不条理、滑稽が表面化する。つまり、近代的に区分され領域化された夫々の囲いに内在する「外」が垣間見られてくるのである。自らの内部で差異づけが幅轆し始め、囲いの中心が狂いだす。内外の区分は曖昧となり、異質の時空間がぶつかり合い、その間での「訴訟」が頻発するが、審理の手続きも、裁定の基準も不分明であり、基準のヒエラルキーも定かではなくなる。「問題解決」の過程は差異づけを模索しつつ中心を狂わす過程に変質し、日常的な瑣末な駆け引き、勘違い、迂濶さなどがプロセスの内実をなすことになる。S. Freudの言う第1次過程めいたものが表面化する。

5. 大量生産時代の「問題解決」的思考

このような時代には、「問題解決」的思考法は第1次過程めいたものまでを含み込んだシミュレーションやコピーの思考法として生き残ろうとする。

そもそも問題解決とは状況を問題的状況だと感じとり、それを解決するために策を講じて、解決すべく「問題」を立て、その行為をコントロールするための統合的な見解、つまり「仮説」を考え、それを実際に調べて証拠だてる「検証」をしていく過程だとされている。それは「問題」として状況を限定する局面、解決に向けての「仮説」という状況限定の局面、「検証」という限定の局面が「推論」という名の連続性において循環する過程である。この連鎖は、何らかの基準やイメージによって導かれねばならない。換言すれば状況を或る「見立て」（モデル、シミュレーション）によって把握する過程であり、様々なアナロジーによって、その各局面を相互にコピーし合う関係にすることである。

その思想的源流とも言えるプラグマティズムを見てもわかるように、これは「或る主体による発明・発見」を理想的なモデルとする科学技術という行為に範型を求めており、近代科学技術を支える生活風土という暗黙知を称揚するものであった。たとえばJ. Deweyらは、この過程を生産活動に範をとる目的的行動の文脈に持ち込み、「適用」や「適応」概念をキーワードとして、個々の反射のモザイク的統合という見解を越えるという思想に結実させた。「目的」という概念の中に儀式的に反復可能なものを未来に投影する近代思想の生産主義的な変形の一つである。

特に19世紀末からの科学技術の行為が生活の主流を占めていくにしたがって、この「問題解決」という思考の方法は通俗化されていった。我々がよく「基本に帰れ」などと口にするとき、目的や目的を設定した時の事情を思いだしてみようとする行為がそれに類する。これは科学技術が発達するにつれて精緻化された文脈である。問題定立と仮説と検証行為が相互にコピーし合う関係（ルール）は重工業的な機械にモデルをとるシステム化の一層の進行をはかる過程として構想された。この過程が他のルールを圧倒して、混沌の中から図として浮かび上がり、この図の中での動きが優位の意味ある行為として認識される。

近代社会の進展は分業の進展である。社会は各領域に分化一分科され、それぞれの領域は自らを認識するための方法……つまり「科」学を持つに至る。こうして社会の全領域は

科学技術化されることになる。そして科学技術化された各領域は能率や効率の増進という共通尺度を持ち、有用性を共通の価値とする。各分野で科学技術化を進めるということは他の社会の様々なシステムに接合され、その中で機能し得る（役立つ、有用である）ことを意味することになる。問題解決とは複雑な世界から「科学技術的に状況を抜き出し、それらを結合する」過程という性格を強くもつに至った時代の認識論である。

J. Dewey はこれを「習慣を作りなおす習慣」として、つまり「習慣の二重性」として示した。この図式こそ旧習への固執とラディカルな改革とのいずれにも属さないとして、「イノベーション」の図式として登場した。つまり「進歩」、「成長」、「再構成」、「開発」などのシンボルが「問題解決」過程を支えていたのである。これらは各局面の相互参照（コピー）の関係を支えるシンボルや概念が事態が「変化」したか否かを判定する基準を与え、変化という概念を意味あるものにする時間・歴史のシンボルである。それらは問題定立、仮説、検証という各局面の相互コピーの反復が変化をもたらすという意識を可能にした。

この「問題解決」的思考が社会の主流を占めるとき、人々は確かに種々の資源を開発するが、それを自分が活動している狭い領域で遭遇した当面の障害の解決だけに限定して行うことを当然のことと見做すようになる。そしてその行使する力に、その操作が持つはずもない目標を課するようになり、このことを自明視する。「問題解決」的「明晰」性を過信するようになる。個別的組織形態（たとえば企業、学校）の制限された個別目標や個別作業にとっては、この思考法もかなりの有効性を維持できるだろう。また企業という組織形態は際限のない経済成長から生じる剰余力を吸収しうる。国家による組織化を離れても、多国籍企業として存続する企業という組織は、まさにグローバルなものに見え、その活動形態である「問題解決」は普遍的なものであるように見える。それは暴力すら犯罪や事故の「対策」、局地戦争の「紛争解決」の形で飼い馴らすことが出来るような観を呈する。それらは犯罪防止機構や教育方法、安全対策、平和活動によって「解決」可能な問題として「現実的に」取り扱われる。人々は内面の狂気や熱狂らしきものを、これらの犠牲者を通じて疑似的に体験し、こうして崩壊を隔離しておけるような一時的な境界を設定しているような錯覚を持つことが出来る。つまり有用性の世界を破壊する蕩尽すら己の論理内に引き入れて飼い馴らし得る方法として「問題解決」があるように見えるのだ。

しかしここで生じる問題は、この思考法が「反復」や「変化」を輪郭あらしめた大量生産時代のシンボルに代わり得る新しいシンボルを産みだし得るかということである。非常に複雑化している境界不明の関係を統合できるシンボルの母胎になり得るかだろうか。つまり一義的な乗り越え、アウフヘーベンが困難な時代にふさわしいシンボルを生み出し支え得るかという問題が生じる。普遍的に見える多国籍企業や各共同体、国際連合などの諸目的も所詮特殊なものである。これらによっても制限（コントロール）されないようなエネルギーを考慮しなければならない場合には、この思考法は種々の限界を呈する。我々は思い通りに操作できるかも知れないと考え得るものに優越感を持って取りかかるが、それは、その操作方法自体によって挫折させられるのである。つまり近代的に領域設定された内部での思考法によって、それでは包摂できない難問に当たろうとする愚を犯していることに気づかざるを得なくなるのである。

6. 消費時代の「問題解決」的思考

「問題解決」的思考法は「変化」というものを待ち望むそれである。その場合その過程をくつきりと輪郭づける「主体」という概念装置を必要とする。それは一貫性を維持する実体として欲望、真理・理性の源泉でもある。では、このような「主体」は電子メディアの時代に可能なのか。確かに、現代では統一化の担い手としての「主体」を構想しにくい世界に我々は生きている。我々の「現実」とは電子メディアによって構成される環境の中での生活である。この現実はそのそれぞれの媒体の独特の視線によって作られた「現実」である。つまり諸媒体の眼差しの照射をあびた諸「現実」である。たとえば「新聞的手法」や「テレビ的手法」という紙面やテレビカメラが作り出した「現実」がある。人々はそれぞれ異なった記号体系に属する記号群を見、その分節的世界にいる。我々は肉眼などの持つ時間的・空間的・生理的制約を越えて、というか、肉眼とは何かすら不分明な時間的・空間的・生理的次元に向かって解放されている。「現実」とは媒介する記号体系によって不断に累積され、統一が不可能であるような変容を遂げていくものであり、我々はそのにおける記号現象を仕事として、あるいは遊びとして消費しながら生きている。

ここにおいては一貫性を核とする近代的な主体の概念は維持しにくくなる。なぜなら〈端末をもつ個人・社会生活〉の図式は旧来の〈送り手—受け手〉図式（またそこにおける一方通行的コミュニケーションを支えてきた主体の identity）を困難にするからである。確かにコミュニティや相互主観性や場 situations の重要性を説くことも可能であるように見える。しかしこれらの図式も旧来の主客の図式における主体に支えられた真理・理性概念を抜け出せない。なぜならそれは「変革」を旗印にする主体の知性を称揚する思考を抜け出せないからである。自己という疑問の集合体に対して一元的解答で沈黙させられないものに対して、我々は「習慣を作り変えていく実験を続けていく一貫した変革的主体」と言い換えることによって、何とか捉えようとしている。つまり近代的な前提である自己の同一性の幻想を維持しようとしているのである。

一方通行的な〈送り手—受け手〉図式すら大量生産的コピーを可能にする概念である「主体」によって支えられている。もちろん〈送り手—受け手〉は相互に逆転し、相互批判を行う「主体」でもありうる。しかし、ここでは相互批判、相互否定やアウフヘーベンを可能にする一義的なインターフェイスが予定されていたのである。だが境界不明の関係は相互の否定関係を非常に複雑化し、一義的な乗り越え、アウフヘーベンを不可能にした。実験的思考を支えてきた一義的自己の概念力を失い、多義的なインターフェイスの時代における分身、変身の問題が前面に出てきたのである。

近代の認識論は〈ものの関係を言語体系に翻訳〉するという二元論に始まる。差異のシステムである言語によって世界を分節化し、記憶する。知識、思考、感性、経験は言語によって構造化され、理論化され、書物となって平面化され、客体の写し絵となる。近代はこのような2元論的分節からはみ出すものを未知として排除するか、未来において、この2元論的思考に包摂し得るものとしてきた。ここでは言語、記号に対応する「もの」の世界が厳然としてあり、それが記号に翻案さるべき「現実」というものを提供していた。

しかし現代においては、我々は多媒体接触行動によって「現実」を構成していく。我々は刻々に物語をつくりつつ生きる。科学的実験をモデルにする時代から演劇をモデルにす

る移行する時代を生きている。ここでは当然ながら旧来の〈オリジナル—コピー〉図式の有効性は失われる。それは単にオリジナルを特定出来ないという事態を越えている。多媒体がそれぞれの「現実」を作るときオリジナルへの接近は意味をなさないのである。

電子情報の社会では情報テクノロジーが社会の末端まで浸透するために、この還元のプロセスが多分化し、各サブシステムはお互いに異質の島々として局所化する。従来の国家や政府による一元的な中枢による操作は後退し、社会の各集団やメンバー一人一人が大なり小なり情報操作に荷担するようになる。新聞、テレビ、パソコン通信などの情報を各個人が自分流に曲解（解釈）し、意図のもしくは無意図的にお互いに操作し合う。この複雑化した過程をシミュレートすることは、益々「現実」を虚構に近付けていく。Virtual Realityはこのような社会状況において語られる。

7. Contingency

「問題解決」は、それ自身あらゆる事柄に対して開かれた方法意識であるように見え、電子情報の社会でも、この近代的方法が装いを新たに生き延びようとしている。複雑性と偶有性 Contingency において situations を見ていく「問題解決」法として大量生産時代の認識論からの脱皮を図っている。それは現代人が選択の強制と一時的・偶発的な situations に生きざるを得ないという事態を認識可能にする方法であるように見える。それは、我々が選択に迫られつつも、選びとった顕在的体験も、また、その地平において指示される他の体験や行為の可能性はたんに可能性であるに過ぎず、したがって期待されるそれとは別様でもありうることを認識させてくれる方法のようである。つまり幻滅のリスクと必ず関わり合いになりつつ認識を進めていくことを是認する方法として有効性をもつように見える。また、これによって「意識」の概念の変更も行なわれ得るとされる。つまり「問題解決」的に見た意識的体験の特徴とは、過剰要請によって自分自身を制御していくこと、つまり複雑性と Contingency が一層正確に言明できる仕方で制御できることを示そうとする。即ち、意味の形式で選択的体験処理を調整しながら事態を制御していくことが出来るとするのである。

確かに世界とは複雑性そのものである。それは一瞬ごとに常に別様のしかたで縮減されることによって秩序を形成していく。つまり複雑性は普遍的に構成された選択の領域として、常に新しいまた常に別様の選択の〈出所〉として、つまり世界として依然維持される。だから、意識は意味を反省する実体的な主体ではなく、潜在性と境界とが問題となる「体験」と考えられるのである。

主客二元論では世界の複雑性と意識の複雑性とが対称的に考えられていた。ヘーゲルやフイヒテのように意識を反省過程とすることは、境界がすでに知られている場合にのみ可能である。しかし「問題解決」的な意識は外部世界に対して非対称的なものと見なされる。確かにトートロジカルに展開する主体というものは、すでに境界が知られた世界でのみ通用する。……「或るものを否定する」といっても否定する基準が近代の理性の同語反復、コンセンサス（常識）にもたれかかったものであるとき、それはトートロジーになる。だから、「問題解決」的否定作用は「とりあえず否定したことにして」というように除外したものを保留しておくという手続きをとる。このとき、主体は取り合えずの境界設定をする機能になる。主体とは境界設定をする非連続の過程そのものとなる。だからそれは異質性

の組み合わせから組み合わせへと絶えず飛躍し続けるものである。こうして意味とは入力を規制するものではなく、選択能力を規制するものとされるのである。

こうして「問題解決」とは「体験の秩序」の形成過程であるという姿をとることが可能となる。この思考法においては、意味とは「体験処理の形式」であり、体験の直接的顕現性と体験の他の可能性の超越性とを統合する体験処理の形式をいうのである。過剰な世界に生きるとは体験をその都度満たしている瞬間瞬間の所与がたえずひっきりなしに他の所与を指示している世界に生きることである。今の体験の内容でないあるものを常に指示しているアナロジーの世界である。「問題解決」的思考においては意味概念は第1次的なものであり、自己意識に依存せずに取り扱い得るものである。(主観概念に準拠せずに規定することができるものである。)まさに意味はシステムによって構成されるものだと考えられるのである。

「問題解決」による選択過程における否定作用は、諸事象を止揚できない暫定性のうちにとどめる。つまり、否定の否定は暫定的に除外されていたものを取り戻し、新たな一般化に役立つものとされる。ただ時間だけが可能性を決定的に取り除く。選択過程での否定は可能性を取り除かないのだ。まさに「問題解決」は変化に倦み無時間に憧れる現代人の認識論なのである。現代の空間志向は否定の保存的側面を強調するものである。我々はこうして期待構造を保存しようとする。「問題解決」とは「意味による体験処理」という特徴をもつ。それは複雑性の縮減と保存を同時に行う。特に強調すべきは、直接的に与えられた明白な体験に他の可能性への参照や再帰的な一般化的な否定の潜在能力を混ぜ合わせ、そのようにしてリスクのある選択に対して備えるという仕方で行う。だから意識を意味を反省する実体化できる主体としてではなく、潜在性と境界とが問題となる体験として捉えることが出来るのである。

確かに「問題解決」法による意識的体験の特徴づけは過剰要請によって自分自身を制御していくことを可能にするように見える。それは過剰から意識は生じ、意味は過剰から生じるという過剰の根源性を立論の基礎に据えているからである。しかし、この意識の生成／拡張論は主観への閉じ込めを拒否する力を可能にするだろうか。言い換えれば、それは「変身」や「分身」を可能にするだろうか。むしろこの方法意識は我々が自らの臆病さのために「意味」にすがりついている、きわめて退屈で通俗的なものではなからうか。「問題解決」的思考の核となる「意味」は、「主体」の変身／分身における「否定作用」を拡張しない。なぜなら「問題解決」による暗黙知の発掘過程は「発明・発見・開発」というモデルに沿う「成長」の一貫性の追及を脱し得ないからである。換言すれば小市民的所有の一貫性を追及するというせこましさを脱し得ないからである。かかる限界によっては、世界・生の豊饒には対応できないであろうし、そのことが我々をますます窮地に追い込むことになろう。

8. モンタージュ, コラージュ

「問題解決」法は「体験」を位置づける我々の思考の習慣が近代的な有用性に屈伏し、それでは捉え切れない「体験」そのものの価値を放棄させる方向に我々を回収してしまう。それは有用でないものから習慣的に目をそむけてしまう行為を称揚しさえする。そしてこの有用性を原理にまで高め、人間の行為全体をこの原理に還元してしまおうとする。この

有用性の原理が権力を占拠していることに異議を申し立てることは「非現実的」なことのよう思いこませる。だが教育においても有用性一途の行為が途轍もない破産状態をもたらしていることは今や誰の目にも明かになっているのである。有用性を求めるアングロサクソンの一貫性はコラージュ・モンタージュ的方法へ、つまりカフカの迷宮において「体験」を位置づけることに道を譲らねばなるまい。しかし、コラージュ、モンタージュは情報操作の始まりである。だからこそ現代人はパロディにおいて「意味」や「個人」という特権的なカテゴリー、及びこれを起源とすると諸々の暗黙知をもつ状況を揶揄しようとするのである。

しかし、「問題解決」はアングロサクソンの Framework における多重性・重層性を依然として保持している。帝国主義的に「問題解決」というアングロサクソンの展開の過程で他の文化要素を吸収、調整していったため、多様な局面を包含している。この中からいかなる局面を増幅、変形させて現代に生かすかということが問題となろう。

参 考 文 献

- (1) N・Luhmann; Macht, Stuttgart 1975 (Ferdinand Enke Verlag)
- (2) 内田隆三, 「消費社会と権力」1979 (岩波書店)
- (3) J・Habermas; Legitimations probleme im Spärkaptalismus, Frankfurt am Main 1973 (Suchr-kamp Verlag)
- (4) M. Poster: The Mode of Information: The Poststructism and Social Context, Cambridge: Polity Press, 1990
- (5) A. Cohen, Two-Dimensional Man. University of California Press. Inc. 1974